

研究分野	資源評価	部名	研究開発部
研究課題名	十和田湖資源対策調査		
予算区分	水産業振興費		
試験研究実施年度・研究期間	S.4 2～		
担当	上原子 次男		
協力・分担関係	十和田湖増殖漁協、秋田県水産振興センター		
<p>〈目的〉</p> <p>十和田湖におけるヒメマス漁業の安定に資するため、ヒメマス及びワカサギの資源状態及び生態に関するデータの収集と取りまとめを行う。</p> <p>〈試験研究方法〉</p> <p>①水温調査：ふ化場前生出棧橋において測定された午前10時の表面水温データをふ化場(漁協)から入手し取りまとめる。</p> <p>②漁獲量調査：宇樽部、休屋、大川岱の3集荷場におけるヒメマス及びワカサギの日別取扱量を漁協から入手し月毎に集計する。</p> <p>③集荷場魚体測定：大川岱集荷場において、ヒメマスの魚体測定、採鱗、標識確認を行う。漁業期間(4月～11月)に月最低60尾実施。</p> <p>④さし網試験：生出地先においてさし網(目合16, 23, 30, 38, 51mm)を設置し、ヒメマス及びワカサギを採捕する。4月～10月の間に5回実施。</p> <p>⑤回帰親魚調査：ふ化場の前沖等で採捕されたヒメマス親魚データを漁協から入手し集計する。</p> <p>⑥採卵調査：ヒメマス採卵親魚の魚体測定、標識確認を行う。10月、11月に実施。採卵データを漁協から入手する。</p> <p>⑦放流稚魚・スモルト調査：放流データを漁協から入手する。ふくべ網(建網)へのヒメマス放流稚魚及びスモルトの入網(混獲)状況を調べる。</p> <p>⑧遡上・産卵調査：主要河川において、ワカサギの遡上・産卵状況等を調べる。採捕には投網を使用する。4月～8月に実施。</p> <p>⑨提供サンプル測定：漁業者から提供のあったヒメマス、ワカサギの魚体測定等を行う。</p> <p>〈結果の概要・要約〉</p> <p>水温は、1月～6月及び10月では昨年より低く、7月～8月及び11月～12月は昨年並み、9月は昨年より高い値となっていた。</p> <p>3集荷場のヒメマス取扱量(内臓復元重量)は、7.4トン(昨年9.5トン)と低い水準で、4月～7月が1.3トン、8月～10月が5.9トンとなっていた。ワカサギの取扱量は630kg(昨年71kg)で、極めて低い水準であった。</p> <p>漁獲されたヒメマスは、1歳魚から5歳魚で、2歳魚が61%、3歳魚36%を占めていた。</p> <p>ヒメマスの採捕親魚は、メス400尾、オス563尾、計963尾(昨年1,731尾)であった。採卵に使用した親魚は、メス392尾、オス438尾で、採卵数は163,000粒(昨年345,000粒)であった。採卵親魚の大きさ(被鱗体長)は、雌雄とも昨年よりも大型であった。</p> <p>ヒメマス稚魚を、6月21日に223,000尾放流した。放流魚の大きさは、平均被鱗体長が5.1～6.2cm、平均体重が1.7～2.6gであった。</p> <p>銀山沢及び大川沢、宇樽部川では、ワカサギ及びその付着卵は、極めて少なかった。</p> <p>9月26日から10月19日に大川沢及びふ化場前でワカサギ稚魚を採捕した。採捕日により魚体(大きさ)が異なり、10月19日の稚魚は9月26日のものより小さい魚体であった。</p> <p>10月から11月にふ化場前、子ノ口及び子ノ口水門で多量のワカサギ稚魚を確認した。奥入瀬溪流(石ヶ戸から上流)でも確認され、奥入瀬川に降下しているものと思われた。</p> <p>ワカサギの耳石には輪紋が見られ、年齢査定が可能と思われた。</p> <p>ヒメマスの漁獲量(3集荷場の取扱量)とヒメマスの餌であるヤマヒゲナガケンミジンコ、ハリナガミジンコ及び橈脚類幼生の現存量(調査は秋田県水産振興センター担当)との間には、連動した関係が認められた。</p>			

〈主要成果の具体的なデータ〉

図1 水温と漁獲量

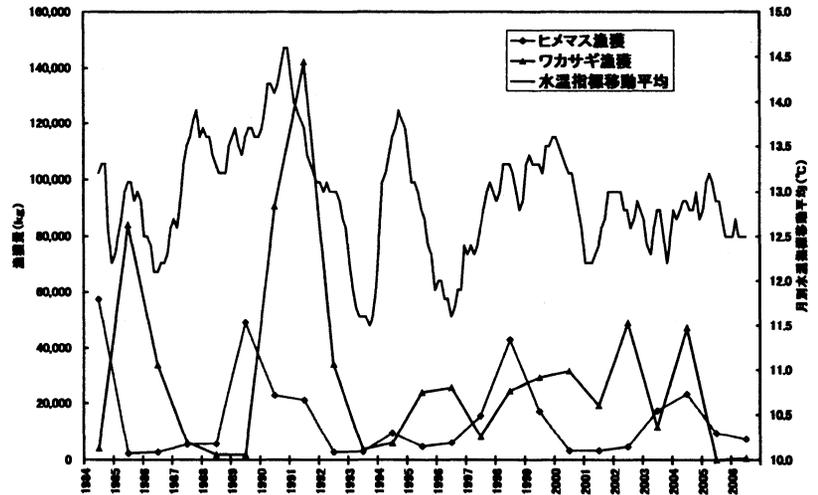


図2 大川岱集荷場の魚体

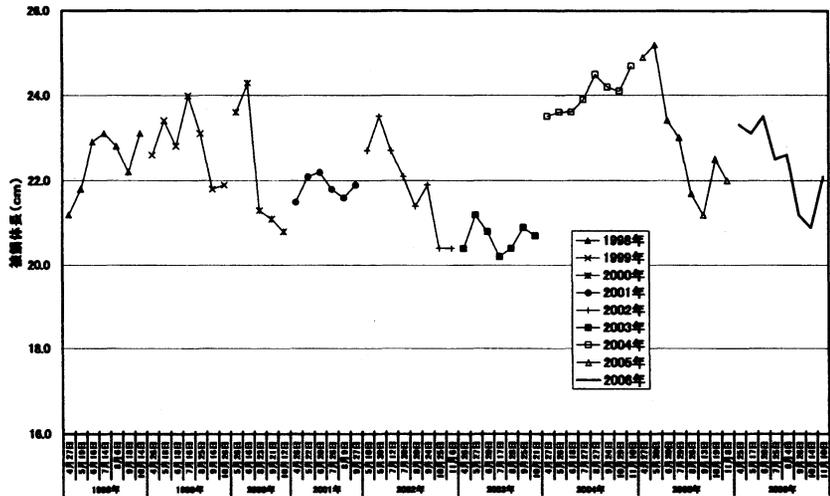
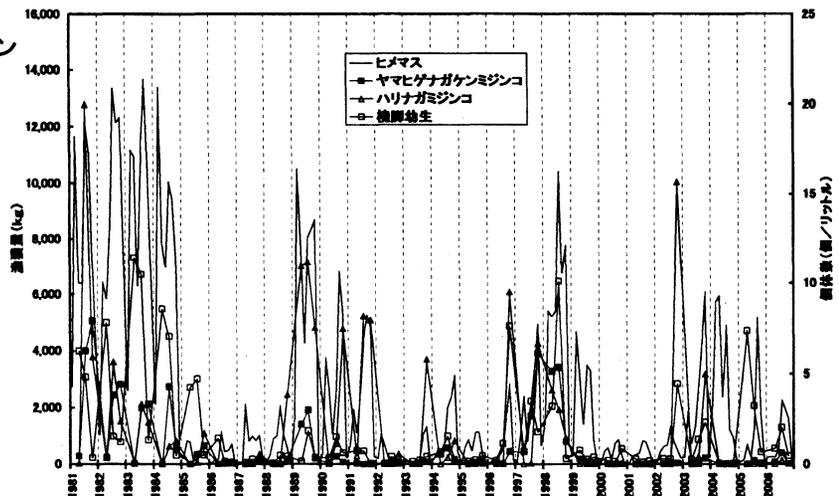


図3 ヒメマスと餌料プランクトン



〈今後の問題点〉

十和田湖においては、ヒメマスとワカサギは同じ餌をめぐる競合関係にあると言われている。両種の変動を明らかにするためには、ワカサギの年齢と成長に関する知見の収集が必要である。

〈次年度の具体的な計画〉

平成 18 年度とほぼ同様。

〈結果の発表・活用状況等〉

例年、開催されている「十和田湖資源対策会議」において発表している。